

令和7年度 第2回 都民を対象としたテーマ別環境学習講座報告

「都会で楽しむ鳥さんぽ～命つなぐ秋～」

□実施日時

令和7年11月22日(土) 13:30～15:30

□実施方法

都立東京港野鳥公園

□実施内容

1. 事務連絡・開講挨拶等

- ・事務局から受講上の注意、全体スケジュール等の説明

(講師)公益財団法人 日本野鳥の会 参与 安西英明 氏

1956年、東京生まれ。1981年、日本で初めてのサンクチュアリ「ウトナイ湖サンクチュアリ」にチーフレンジャーとして赴任する。

現在は参与として、野鳥や自然観察、環境教育などをテーマに講演、ツアー講師などで全国や世界各地を巡る。解説を担当した野鳥図鑑は55万部以上発行。NHKラジオでは、日曜朝の番組で解説役を20年以上続けた。公益社団法人 日本環境教育フォーラム 理事、苫小牧観光大使。



2. 【野外観察】命繋ぐ秋の鳥、虫、植物

【入口付近】

・秋になると、次の春に向けて子孫を残すために生物は色々な進化を準備をしている。今日はそれを探していく。

・木の実には赤や黒をしているものが多いが、それは鳥の目からよく見える色だからだ。鳥はその実を食べ、消化されずに残ったその種子、あるいはタネがフンとして別の場所で排出され、そこで生まれるのを待つ。

・動物の体につくような形や飛ばされやすい形になるなど「種のカタチ」を変えたり、において動物を呼ぶように「実のにおい」に特徴があるもの等、どのように種を残そうとしているのか、考えながら探索した。

・この時期になると、ジョロウグモは交尾をして卵を産んで、卵のうにしまって冬を越す。ジョロウグモのオスは死んでしまったか、メスに食べられてしまったかでないことが多い。



・鳥の世界では、オスがきれいな羽をもったり春にさえずったりしてメスを呼ぶことが多い。ウグイス（ジャッジャという声）の声などを聴くことができた。（繁殖期のオスだけのさえずりと区別して地鳴きと呼ぶ）

【自然生態園付近】

・東京都レッドリストの区部では絶滅危惧 I A 類とされるモズを見ることができた。目の周り(アイライン)が黒=雄、そうでない場合は雌となる。また、目が大きくかわいいと言われることが多いが、先生は「モズの早贄」でシジュウカラを見たことがあるそうで、参加者からは驚きの声が上がった。



【東観察広場・ネイチャーセンター付近】

・都会にいる猛禽類は、小鳥を狙っていることが多く俊敏さが必要なため小さいサイズの種類が多い。野鳥公園ではカラスサイズのオオタカやカラスより大きなトビが円を描きながら飛ぶ姿を見ることができた。



・ネイチャーセンター内には望遠鏡についたカメラがあり、約300m先の止まっているオオタカを見ることが出来た。

・センター内には望遠鏡がいくつかおいてあり、参加者は自由に調整しながら鳥の観察を行った。



3. 【講義】命はどうやって冬を耐えて春を目指すのか

- ・生物多様性を保つためには、物質やエネルギー消費が少なくても幸せに感じられると良い。例えば、遠くに行かなくても身近で自然を感じられるようになると良い。
- ・地球が生まれてから生物はいつ生まれたのか、時間軸と空間軸で参加者と共に考えた。



4. 閉講挨拶、アンケート記入、終了